

一寸法師

昔むかし、あるところに、子どものいない夫婦がおりました。「どうか、わたしたちに子どもを授けてください。」二人は神様に祈りました。するとある日、親指ほどの小さな小さな、元気な男の子が生まれました。「きつとそのうち大きくなるだろう。」「そうですね。」二人は言いましたが、五年経っても十年経っても一向に大きくなりません。そして十三年が経ったある日、一寸法師は決心しました。「父さん母さん、ぼくは京へ行きます。京へ行けば、背が大きくなる薬も見つかるでしょう。」「わかったよ、気を付けていつてらっしゃい。」一寸法師は針を腰に差して刀にし、おわんの舟に乗り込むと、お箸の櫂で水を掻いて川を上って行きました。

初めて見る京の町に一寸法師は目を丸くしました。「なんて人がいっぱいなんだ。気を付けないと、踏みつぶされてしまう。」大通りを行く人たちの足下をすり抜けて、やつとたどり着いたのは大臣のお屋敷。「ごめんくださいあい。」一寸法師は一生懸命叫びました。すると大臣が気付いて、「おや、なんて面白い子どもだ。」と一寸法師を手に乗せて、家の中まで連れて行きました。それを見たお姫さま、「あら、小さいけど元気な男の子だわ。これからよろしくね。」それから二人は毎日、遊んだり、勉強したり、いつも一緒に過ごしました。



ある日、お姫さまは一寸法師を連れて清水寺へお参りに行きました。するとそこに現れたのは、大きな大きな二匹の鬼。「おい、あそこにかわいい娘がいるぞ。連れて帰って、召使いにしてみよう。」二匹はお姫さまを捕まえようと襲いかかってきました。そこで一寸法師、針の刀を引き抜いて、「お姫さまに手を出すな！」と鬼に飛びかかりましたが、鬼は一寸法師をつまんで一呑み。「なんと無謀な奴じゃ。」鬼は大笑いしました。ところが一寸法師、鬼のおなかの中を針の刀で突つきます。「ぎゃあ、これはたまらん。」倒れた鬼の口から飛び出すと、今度はもう一匹の目を突つきます。「うひゃあ、やめてくれえ。」二匹はたまたま逃げて行きました。



「お姫さま、けがはありませんか。」「大丈夫よ、ありがとう。あら、鬼が宝物を落としていったようね。」そこにあったのは、何でも欲しいものが出てくるという打ち出の小づち。「ぼくの背も、出てくるんでしょうか。」「そうね、やってみましょう。」

お姫さまが打ち出の小づちを振ると、一寸法師はぐんと大きくなつて、立派な若者になりました。

やがて一寸法師はお姫さまと結婚して、ますます立派な若者になりましたとさ。

